

自閉症児における携帯電話を利用した移動スキルの指導（２）

福永 顕 1) 大久保賢一 1) 井上雅彦 2)

1) 兵庫教育大学大学院学校教育研究科 2) 兵庫教育大学附属発達心理臨床研究センター

Key Words: 携帯電話, セルフコントロール, 課題分析

【問題と目的】

報告(1)によって、対象児が口答で応対者に報告する、及び応対者の要求した場所へ移動することが可能となった。そこで報告(2)では携帯電話を用いて対象児が応答行動と報告行動を形成することを目的とする。

【方法】

対象児：報告(1)と同様の自閉症男児 (CARS : 38.5 重度自閉症)

教材：携帯電話は、TOYOTA「ぴぴっとフォン」を用いた。

セッティング：プレイルームの入り口3カ所に、動物の写真(オウム・インド象・フラミンゴ)をそれぞれ1枚ずつ貼った。対象児は、応対者から居場所を尋ねられた際には、入り口に貼ってある写真の動物を手掛かりに報告し、また移動スキルでは、応対者は動物の写真の所へ移動するよう対象児に要求した。動物園では、本人、母親と大学スタッフ4名(ビデオ撮影・プロンプター2名・記録者)の6人で実施した。

手続き：課題分析表(Table 1)をもとに、大学で指導を行ったのち、A動物園にて般化テスト及び訓練を実施した。ベースライン及びテスト場面では、対象児に正誤のフィードバックを与えず、また対象児が誤反応を示したら即中止した。

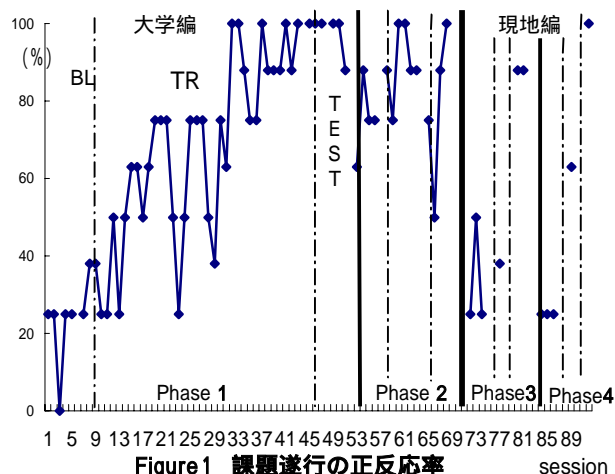
Table 1 携帯電話を用いた対象児と応対者の課題分析表

行動連鎖表	プロンプト
携帯電話を取る	指さし+言語
とりつぎボタンを押す	指さし+言語
携帯を耳に持ってくる	指さし+言語
「もしもし、名前です」	せりふカード呈示
(もしもし先生ですけど、今どこにいますか?)	
「 のところにいます」	写真指さし
(分かりました。では、目的地のところまで来てね)	
「はい、分かりました」	せりふカード呈示
携帯電話を切る	指さし+言語
目的地へ移動する	「どこへ行くのだった?」

大学での指導は、Phase 1, 2 にわけて実施した。Phase 1 は応対者を大学スタッフが、Phase 2 では対象児の母親が担当した。A動物園では、Phase 3 において訓練刺激(オウム・インド象・フラミンゴ)の般化テスト及びTrainingを、Phase 4 において未訓練刺激(ペリカン・ホッキョクグマ・マンドリル・クマ)の般化テスト及びTrainingをそれぞれ実施した。対象児が適切な行動を示した場合、訓練者は言語賞賛を行い、不適切な行動の場合は、プロンプト表に従って修正した。

【結果と考察】

事前指導の結果、対象児は大学スタッフと口答で現在自分がいる場所の命名と報告、及びスタッフが要求した場所へ移動することが可能になった。



携帯電話を使用して実施した「課題分析」(Table 1)の各要素の正反応率を、Figure 1に示した。Phase 1のベースラインでは、応対者が電話をかけても、携帯電話を機能的に活用することが困難であった。Trainingの結果、正反応率が徐々に上昇し、常に100%に近い反応率を維持することが可能となった。母親を応対者にしたPhase 2では、当初70%まで反応率が低下したが、Trainingの結果、Phase 1と同様に100%近い反応率を継続して維持することが可能となった。またPhase 2のテスト条件で正反応率が上昇しているのは、応対者側の教示のタイミングが対象児の移動行動に影響を及ぼしていると考えられる。A動物園で行った般化テストでは、訓練刺激・未訓練刺激とも、20%前後の低い正答率であった。誤反応としては『携帯が鳴ると、とりつぎボタンを押して呼び出し音を止めた後、動物を見続ける』『応対者が移動要請を行っても、再び動物を見続ける』であった。そこで、大学でのTrainingと同様の訓練を行い、応対者の移動要請後に対象児が移動しなかった時に、プロンプターが「どこいくのだった?」と聞くと「 のところ」と正確な移動場所を報告することは可能であった。また、現地訓練後に行ったテストで100%の正反応率を示したPhase 4では、対象児が動物を観察する時間を十分に取った後、応対者が移動距離の近い、新奇の動物へ移動を要請した条件であった。それゆえ、対象児の移動を促進するためには、電話をかけるタイミングと移動場所のアセスメント、移動後の強化方法をさらに検討する必要がある。

【総合考察】

研究(1)(2)を通して、大学の訓練場面では自閉症児に対して課題分析表を用いた言語報告及び応対者の要求場所へ移動するという行動が可能となったが、大学と環境条件が異なる現地では携帯電話によって移動することが極めて困難であることがわかった。そのため今後は、対象児の移動を促進するためにはどのような強化方法が有効なのかアセスメントを実施し、そこから携帯での移動を可能にする指導を検討していく。

(FUKUNAGA Akira, OHKUBO Kenichi, INOUE Masahiko)